

# Searching for Suppressed Voices: The Gaze and Its Implications in Early Cold War Plays of Arthur Miller and Tennessee Williams

(声なき声を探して：冷戦初期アーサー・ミラー劇とテネシー・  
ウィリアムズ劇におけるまなざしとその含意)

岡 裏 浩 美

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文では、第二次世界大戦後の1945年から、60年代（公民権運動とその後の女性解放運動、ゲイ・レズビアン解放運動）以前の冷戦初期に注目し、当時アメリカ演劇界を牽引していた Arthur Miller と Tennessee Williams の戯曲（6作品）の考察をおこなった。急激な経済発展や冷戦等の影響で著しく保守化が進み、家庭回帰が叫ばれていたアメリカ社会や家族を反映したリアリズム劇の中で、規範から逸脱した存在の見えざる・聞こえざる声を拾い上げる為、non-verbal communication である、gaze（見る・見られるという行為）に特に注目して分析を進め、discourse に直接的に描く事ができなかった含意を探っていった。

まなざし（gaze）には、単なる情報収集以外にも、様々な含意（例えば不平等な力関係、ジェンダー格差、階級差、欲望等）が秘められていると考察する、70年代に始まった gaze 理論を中心に、フロイトやラカンの精神分析学や映画理論、フェミニスト理論、パフォーマンス理論等、「見る・見られるという行為」について言及した様々な批評や理論を幅広く応用することで、保守的な家庭劇における抑圧された「声なき声」を検証した。特に、人種的・階級的にはスタンダードなアメリカ人とされる白人中産階級（あるいは下位中産階級）ではあるものの、イデオロギー的には逸脱する3つの存在とそのまなざしに注目した。具体的には、Part One では、激しく主体性や自己の欲望を主張する独身女性に、Part Two では、弱体化する masculinity やアイデンティティに苦しむ一家の大黒柱(breadwinner)役の男性に、Part Three では、抑圧された欲望を抱える男性同性愛者（容疑者）に焦点を当てた。

**【Part One】** Tennessee Williams の *A Streetcar Named Desire* と Arthur Miller の *The Crucible* を扱い、保守的で制限された社会や家族の中で、激しく自己を主張し、自らの欲望に貪欲であり続ける Blanche と Abigail を、彼女たちの演技（性）に注目して分析を行った。主にハリウッド映画における、まなざしの男女差について言及したフェミニスト映画理論や、フェミニストのパフォーマンス理論を用いて、劇中劇の中で必死に自己を演じ続け、女優のように常に周囲から注目される二人と、彼女たちの矛盾した役目（Blanche の Southern Belle 兼 whore/mad woman 役、Abigail の innocent victim 兼 witch 役）について分析を行った。その結果、男性の欲望やまなざしに強要され、単に模範的な女性役を演じるだけの受動的で自己防衛的な演技、とい

う主流の読み方を超えた、女性たちによる抑圧された声の解放、すなわち、主体性や自己の欲望を表現する唯一の手段としての演技という、オールタナティブな読み方を提示した。

**【Part Two】** 保守的な冷戦期では、急拡大するアメリカ経済のけん引役として、女性のみならず、社会や家庭を支配していた中産階級の白人男性にも、一家の大黒柱役という画一的な役割を強要し、自由を奪っていった。模範的な性役割に男性を封じ込めて監視していくアメリカ社会（および家族）を、Foucault のパノプティコンの理論と関連付け、他者の視線を絶えず気にして生きる男性たちの苦しみについて分析した。Arthur Miller の *Death of a Salesman* では、自主性や自己信頼に重きを置くアメリカの古き男性像や、一家の大黒柱という、冷戦期の模範的な男性（夫・父親）像、大衆消費社会において人目を引き、売上げを伸ばすセールスマンといった、様々な矛盾する男性像に翻弄され、状況に応じて常に自己を演じ続ける Willy に注目した。対照的に、Tennessee Williams の *The Glass Menagerie* では、他者の視線による束縛から逃れ、一人の若き芸術家として、見るという行為の主体性を得ることで、男性としてのアイデンティティを確立しようとする Tom の試みを考察した。特に、まなざしを介した力関係について言及する理論や、見る行為とアイデンティティや masculinity 確立との関連性について考察した精神分析学や心理学などを応用することで、社会の主流たる白人男性たちの抑圧された苦しみや葛藤を例証した。

**【Part Three】** 異性愛結婚が強要されていた、冷戦期の保守的なアメリカ社会や家族では、同性愛者は、共産主義者のごとく、国家を転覆しかねない危険な存在とみなされ、厳しく弾劾された。演劇（界）においても、同性愛（者）の直接的な描写や表現はタブーとされていた。しかしながら、Arthur Miller の *A View from the Bridge* では、男性主人公の Eddie が若く美しい男性 Rodolpho を見つめるまなざしと、その含意に注目することで、Eddie 自身も認識できない秘められたホモエロティックな欲望が見つかることを検証した。Tennessee Williams の *Cat on a Hot Tin Roof* においては、Brick のホモエロティックな欲望対象を示唆する Skipper は不在（故人）のため、登場人物間の見る・見られるという行為の分析は行わず、代わりに、禁じられた同性愛的な欲望や、抑圧されたゲイとしてのアイデンティティや苦しみ等を、どのように当時の制限された枠組みの中で、保守的な観客に提示・表現していくのかという audience gaze を考察した。クローゼットの同性愛者である Williams 自身の戦略や試みとも関連付けながら分析することで、冷戦初期の戯曲における、抑圧された同性愛的な欲望や男性同性愛者の声なき声を検証した。

**【結論】** まなざしに注目して分析することで、冷戦期の保守的なアメリカ社会や家族、そしてイデオロギーからかい離した、タブーな存在の抑圧された声、すなわち、抑圧された欲望や主体性を求める声なき声を、作風が全く異なるとされる Miller と Williams という、戦後のアメリカ演劇界を代表する二人の戯曲家の作品の中に、共通して見出せることが明らかになった。一見、保守的な社会や家庭を反映した万人受けする内容やテーマを扱い、さらに、表現法も制限される、当時主流のリアリズム演劇の手法を用いながらも、既に二人の戯曲（演劇）には、来る 60 年代の様々な解放運動・社会運動の先駆けとなる、抑圧しがたい「声なき声」が含意されていることが検証された。